

ニューサウスウェールズ大学 海外日本語教育実習の手引き

UNSW

お茶の水女子大学グローバル教育センター

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
比較社会文化学専攻 博士前期課程日本語教育コース



UNSW キャンパス



実習の様子（オリガ）



実習の様子（西澤）



実習の様子（吉田）



実習の様子（佐々木）



オペラハウスの前

目 次

| | |
|-----------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 1 概要 | 3 |
| 1-1 実習全体の流れ | 3 |
| 1-2 生活について | 9 |
| 2 UNSW の日本語教育の紹介 | 11 |
| 3 担当授業での活動 | 15 |
| 3-1 Introductory Japanese B..... | 15 |
| 3-2 Intermediate Japanese B | 17 |
| 3-3 Advanced Japanese B | 20 |
| 4 担当授業以外で参加した授業について | 23 |
| 5 授業外の活動..... | 26 |
| 6 実習を通して学んだこと | 28 |
| 7 来年度に向けて | 32 |
| 7-1 来年度へ向けて | 32 |
| 7-2 どんな人がこの実習に向いているか | 32 |
| 7-3 これから実習に参加しようとしている人に一言 | 33 |
| 8 実習を振り返って | 35 |

はじめに

UNSW 海外日本語教育実習の成功とその背景

森山 新

オーストラリア、ニューサウスウェールズ大学 (UNSW) の日本語教育実習は 1998 年度から 2003 年度まで 6 回にわたり実施されていたが、諸般の事情からその後中断していた。この実習の再開と継続をめざし、2011 年 3 月 11 日、私は協定締結の話し合いのため、UNSW に向かう予定であった。しかしあの東日本大震災の大惨事は、私が搭乗するはずであったカンタス航空を欠航に追いやってしまった。しかし翌日、なんとか訪豪にこぎつけ、トムソン先生をはじめ UNSW の先生方などにお会いし、協定や日本語教育実習再開の話し合いを進め、その年に実習生 5 名の枠を含む大学間学術交流協定が締結されることとなった。そして 2012 年、この実習は日本学生支援機構のショートビジットプログラムに採択され、その支援を受けながら、最初の実習生 4 名が 8 月 9 日訪豪した。

6 年間にわたり行われた実習の長期中断や大震災などの様々な試練を乗り越え、今回、第 7 回日本語教育実習が成功裏に実現できたことは、それを推進してきた私にとっては何にもまして喜ばしいことであった。しかしそれを実現に導いた背景には、UNSW の日本学科の先生方の献身的なご協力や国際課の方々の暖かいご支援、本学グローバル教育センターの越智先生の協力、そして長い間実施されていなかった中で、自ら志願して参加した 4 名の実習生の勇気などがあってこそこのことである。まずもってそれらの方々に心から感謝を申し上げたい。

今回の日本語教育実習は 4 月の新学期に募集を開始し始まった。4 月終わりには参加者が決定し、担当する日本語クラスと受入教員の決定、事前学習を経て、8 月 9 日の出発の日を迎えた。ふりかえれば、あの震災翌日の 3 月 12 日に乗ったカンタスと同じ時間の便であった。成功に責任を持つはずの私自身が、日常業務の多忙の中、参加学生に対し十分な事前教育ができなかったことが何よりもの反省点となっている。また私自身、かつて行われていたオーストラリア実習についてはほとんど何の知識もなく、手探り状態で始めたということもまた、事前準備不足につながった。にもかかわらず、UNSW の先生方が毎週金曜日に全体ミーティングを行い、授業の前後にも受入教員と学生とで打ち合わせを行いながら細かな点にまで指導をしてくださったおかげで、2 か月の間に 4 名の参加者は 9 月 27 日大きく成長して帰国した。彼らの一回り大きくなった姿を見ると、今回の実習が受入れ大学の諸先生方に支えられながら成功にこぎつけたことを実感している。

6 回までの実習生は博士後期課程の学生や日本語教育経験を有する学生も含み教育・研究経験の豊富な学生を派遣していた。しかし今回の参加者は大学院の 1・2 年生であったため、実習の内容はまさしく教育のいろはから教える場となった。それだけ受入大学の UNSW

の先生方にはお世話になったが、若い分、多くのことに挑戦し、多くのことを吸収して、成長も大きかったと思う。そして日本語教育に携わる意義を体で感じ、将来日本語教師として活躍する確かな動機づけと土台作りにつながったに違いない。

本報告書の発行により、第 7 回の実習についてできるだけ詳細に報告し、第 8 回の実習により多くの学生が関心を示し、より成功に導かれる手引きとなっていただければ幸いである。



UNSW Gate 9

1 概要

今回の実習は、日本学生支援機構のショートビジットプログラムの支援を受け、「第二言語習得演習」の授業として、2012年8月10日～9月27日の7週間にかけてニューサウスウェールズ大学（The University of New South Wales、以下 UNSW）にて行われた。担当教員は森山新先生、参加者は日本語教育コースの学生：ガルマーエヴァ オリガ、佐々木馨（博士前期2年）、西澤真奈未、吉田綾（博士前期1年）であった。

実習の全体の流れは大きく分けて実習前のミーティング（勉強会）、シドニー到着後の実習、毎週のミーティングの三つからなる。以下に、それぞれについて具体的に述べていくこととする。

1-1 実習全体の流れ

● 事前ミーティング

UNSW とお茶の水女子大学が協定を結んだのは昨年度であり、実習が行われることが正式に決まったのはそのときになる。

この実習は10年前にも行われていたようだが、当時の実習の様子を知る手がかりは当時の報告書を読むことだけであった。

右も左も分からない状態だったため、私たちは事前勉強会を開催した。勉強会の主な目的は、トムソン先生をはじめとする UNSW の先生方の御著書を読み、UNSW そしてオーストラリアにおける日本語教育についての理解を深めることと、実習に対する不安や疑問点を共有することであった。本来は開催の3か月前に各種申請を行わなければならないが、初回ということもあり実習参加者が決定したのは5月の中旬であり、その頃にシドニーでの滞在場所、航空券など実習に関わる費用についてのミーティングが森山先生を含めた5人で行われた。なお、最終的な費用（滞在費、航空券、海外保険）が決定したのは5月25日である。

その後、実際に実習を行うクラスを決定するために6月に入ってから実習計画書と日本語教育に関する履歴書を作成し、UNSW の先生方に送付した。

それと同時期から勉強会を実施した。勉強会で読んだのは『学習者主体の日本語教育：オーストラリアの実践研究』（トムソン木下千尋編, 2009年, ココ出版）と、オーストラリアの日本語学習者に関する論文で、週に1回集まった。それ以外にもフェイスブックでグループを作成し、情報共有を行った。それ以外に行った事前準備は以下の通りである。

- ・ UNSW のホームページ、その中の Japanese studies のホームページに目を通した。
- ・ UNSW の日本語教育の事情を知るため、トムソン編 (2009) をはじめ、文献を読んだ。これによって、現地の先生方がどのような取り組みを行ってきたのか、そしてその背景にどのような考え方や思いがあるのかを知っておくことは、UNSW で実習を行う上で非常に意義があった。例えば、授業案を作るときや授業を行うとき、ある文法項目を教えるための導入やタスクをどのように行うのか、どのような授業進行をするかと

いう様々なことに、これら理念が関わっていた。このように、先生と話しているときや実習の場で、本で読んだ理念がどのように実践の基盤となっているかを学ぶことができた。

- ・ オーストラリアの日本語教育の現状について調べた。

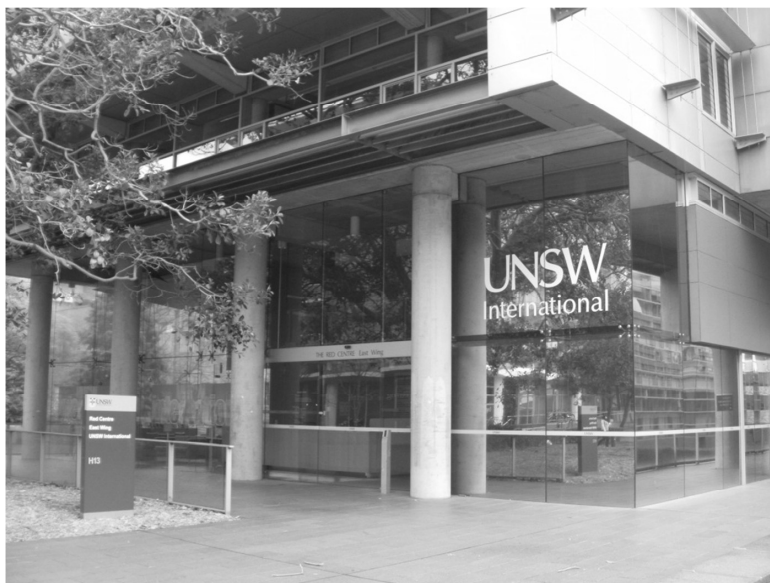
● シドニー到着後

個人によって異なるが、シドニー到着後の実習のおおまかな流れは以下の通りである。最初の2週間程度は様々なクラスの授業に参加した。後半は実習生自身が教案作成から授業実施まで行わせていただいた。

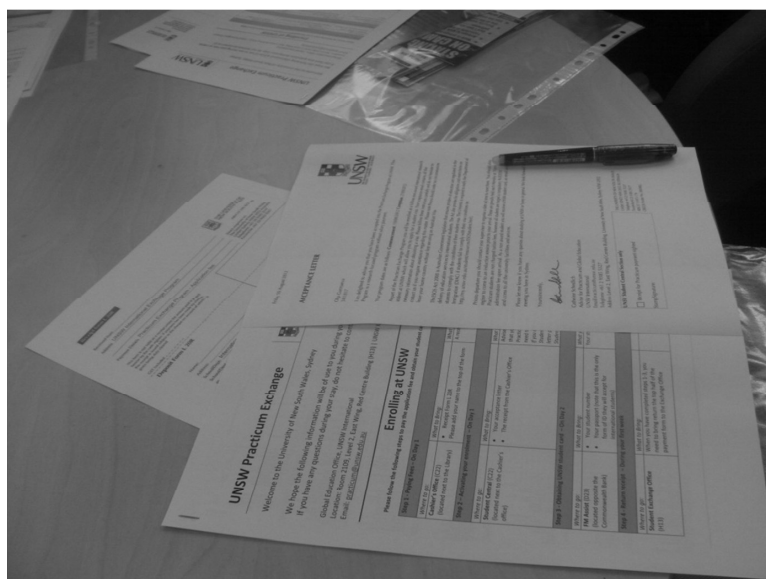
到着前に実習生が担当するコース（Introductory、Intermediate、Advanced）が決まり、基本的に各自は担当コースの授業において、授業中のサポート、活動への参加、最後に教壇実習を行った。担当コース以外の授業への参加も可能だったが、後半からは教壇実習、テストの採点、教案作りなど、担当コースに集中していた。コースごとの報告は第3章を参照されたい。

シドニー到着後、UNSWで留学生の受け入れ手続きが必要だったので、それについて以下に説明する。

到着の当日、UNSW Global Education Officeで岡本先生と短期留学生係が説明会を行い、研修プログラム（Practicum Exchange）への登録手続きと大学での生活について詳しく話をしてくれた。



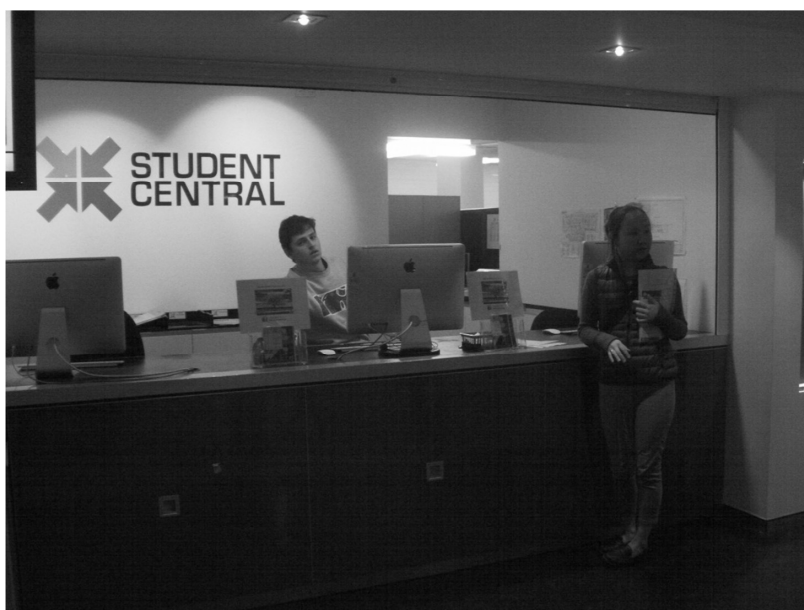
UNSW Global Education Office



手続きの書類

研修プログラムへの登録手続きは以下のようになっている。

- (1) 研修生は説明会の際、ID 番号が入っているアクセプタンスレターを各自もらう〔到着日〕
- (2) 大学の会計課で参加費（330 ドル）を支払い、領収書をもらう〔到着日〕
- (3) (1) のアクセプタンスレターと (2) の領収書を持ち、学生課で研修プログラムへ参加を登録する〔到着日〕
- (4) (3) の登録の 24 時間後、学生証をもらう。パスポートとアクセプタンスレターが必要〔登録の翌日〕
- (5) (2) の領収書を UNSW Global Education Office に返却する〔登録後〕



学生課にてプログラム参加の登録



会計課



FM Assist にて学生証受け取り

研修プログラムへの手続きが終わり、学生証を受け取った後、大学内のインターネットやパソコンが使えるパスワードを獲得する必要がある。学内にあるパソコンやネット環境の窓口（アシスタントカウンター）に行って、学生証と設定してほしいパスワード（数字、大文字、小文字が入っているもの）をアシスタントに伝え、設定してもらう。このパスワードでは大学内の無線 LAN、学内のパソコンの利用、学内サイトへのアクセスができるようになる。

それぞれの手続きについて、到着日の説明会で詳しい話があるが、問題や質問がある場合は、**Global Education Office** に尋ねるとよい。

大学で、実習生が使用できる部屋を一部貸していただいた。この部屋は他の研究員や院生が使う部屋であるが、パソコンが置いてあり、印刷もできるようになっていた。印刷とコピーは、印刷室でできるが、印刷の設定が必要である。やり方は、同じ階にある受付の事務員の方に教えてもらった。また、印刷室は平日の 9～17 時に利用可能であり、土日は使用できない。



実習生が利用させていただいた研究室の様子

各授業では、先生と学生が共有できるネットサービス（ホームページ）が使われている。このページには、先生が授業の教材をアップロードしたり、学生が宿題を提出したり、イベントや授業についてのコメントを投稿したりする。今回は BB9 と Moodle を紹介してもらい、それぞれの授業を担当する実習生はその授業のページに追加された。追加手続きはその授業の教師が申請するが、時間がかかるため、初日に追加してもらうようお願いしたほうがよい。

実習生は各自で翌週に参加する授業を決定し、当該週の前の週の金曜までに Google サイトに作成した「UNSW 教育実習」のホームページ (<https://sites.google.com/site/2012unsw/>) に、翌週参加する授業に名前を記入した。これによって UNSW の先生方に実習生が授業に参加することを事前にお伝えした。ただし、非常勤の先生には事前の早い段階で、メールなどで見学の許可をいただけるか連絡をとった。



初顔合わせ時のミーティングの様子

- 毎週のミーティング

実習期間にわたり毎週の金曜日に UNSW の先生方、森山先生と実習生 4 人が会議室で集まりミーティングを行った。実習生は一週間の目標を設定し、ミーティングでその目標が達成されたか、または達成させるために何をしたかについて話し合った。実習中の悩みや問題、分からないことや困ったこと、面白かったことや気づいたことなどを全般的にみんなで共有し相談する機会でもあった。また、先生方からのフィードバックやご指摘も受け、反省しながら次の週の目標を考えることができた。

1-2 生活について

- 宿泊施設について

今回、研修生はニューサウスウェールズ大学の New College に泊まることになった。New College は大学の正門から 2 分ほど歩いたところにあり、大学生が住んでいる寮である。研修生が泊まった短期滞在用のゲストルームにはキッチン、トイレ・シャワー、食器、調理道具、洗剤、ベッドシート、タオルなどが付いている。週に一回タオル交換と清掃が行われる。コインランドリーは 2 階にあり、いつでも使用できる。

また、1 階にはカフェがあって、朝・昼・夜に食事が提供される。外食より値段が安い。寮のスタッフが平日 9 時から 5 時まで勤務し、それ以外の時間に対応してくれるスタッフもいる。到着時間が早い場合は、事前に寮と連絡をとっておくと、部屋への入室はスムーズに行える。



寮前にある校庭

- 食事について

大学の近くに Coles、Woolworth といった大きいスーパーがある。また、日本の食品を売っている店も多い。

外食は日本よりかかるといってもいい。大学内のカフェは、サンドイッチや軽食が多く、ランチで平均 10 ドル。寮の近くには、中華、インドネシアなどのエスニックの店があるが、一品 10 ドル以上である。

● 交通について

シドニー都内は主にバスと電車で移動する。電車のチケットは各駅で買える。バスのチケットは、プリペイドのものが多く、バスに乗る前にコンビニや駅で買わないといけない。1 回券もあるが、10 回券を買うと割引される。

ただし、バスのチケットは MyBus1、MyBus2、MyBus3 があり、乗る距離によって使うチケットが異なってくる。例えば、大学からシドニーの中心部までは Zone 2 で MyBus2 が適用され、大学からシドニー空港までは MyBus3、スーパーまでは MyBus1 というふうに違うチケットが使われる。どれを使うかについては、インターネットやパンフレットで調べられる。

● 手みやげや名刺について

大学をはじめ、見学で訪問する日本語バイリンガル校や土曜学校などでいろいろな方にお世話になる。あいさつのためにも名刺と日本のお菓子などの手みやげを持って行くとよい。お菓子については個人的に渡すものと、研修生全員から渡すもの、というふうに考えて用意したほうがよい。また、名刺については実習クラスの学生から連絡先を求められることもあるので準備しておくとう便利。

● 気候・服装について

研修期間の 8 月～9 月は冬の終わりで、昼間は暖かいが、朝晩は結構冷える時期である。8 月は風が強く、雨が降る日が多い。急な天気の変化で体調を崩しやすくなってしまうので、注意したほうがいいだろう。また、空気が乾燥しているので、リップクリームやローションを用意するとよい。

服装に関しては、暖かいジャケット（ダウンでもよい）、またはセーターが一枚あると安心。毎日学校に通う服装はスーツではなくてもいいが、フォーマルなものがよい。ジーンズはお勧めしない。

2 UNSW の日本語教育の紹介

● 教員

〔専任講師〕 トムソン先生、福井先生、岡本先生、飯田先生、アーマー (Armor) 先生、
橋本先生

〔非常勤講師〕 松井先生、上田先生、中村先生、大浜先生



先生方 (左から Lin さん、福井先生、アーマー先生、橋本先生、飯田先生、岡本先生)

● 授業担当

| | | | |
|----------|--------------|--|--------------|
| ・ 日本語の授業 | Introductory | 〔専任講師〕 トムソン先生、福井先生、橋本先生 〔非常勤講師〕 松井先生、上田先生 〔大学院生〕 Lin Feng さん | |
| | Intermediate | 〔専任講師〕 飯田先生 | 〔非常勤講師〕 中村先生 |
| | Advanced | 〔専任講師〕 岡本先生 | 〔非常勤講師〕 大浜先生 |
| | Professional | 〔専任講師〕 橋本先生 | |
| | Capstone | 飯田先生、岡本先生、トムソン先生 | |
| ・ その他 | Contemporary | アーマー先生 | |
| | Literature | 橋本先生 | |

● 日本語の授業の時間割

Introductory: Lecture (2 h), Tutorial (1 h), Seminar (2 h)

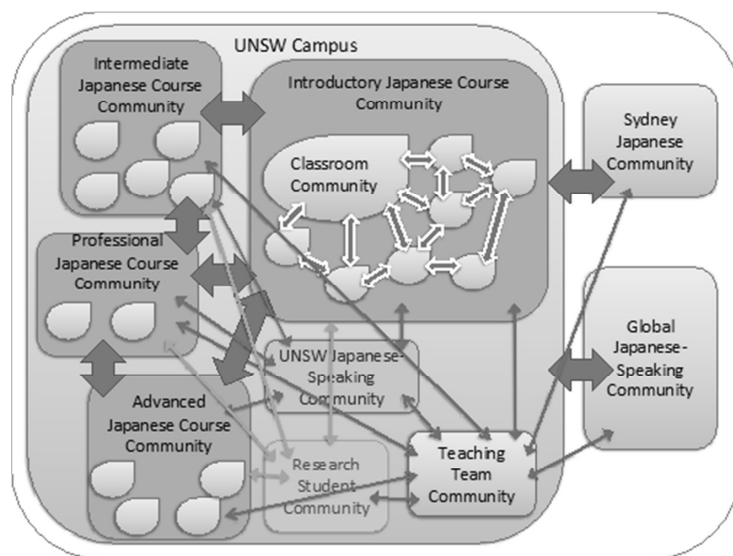
Intermediate: Lecture (2 h), Tutorial (2 h)

Advanced: Lecture (2 h), Tutorial (2 h)

● Community of Practice (CoP)

UNSW の日本語教育の特徴の一つは、同じレベルのクラス間、異なるレベルの授業間、そしてクラスと学校外の日本語話者コミュニティ間に、さらに大きなコミュニティが形成されていることだ。生の日本語に触れたり、日本語を話したりする機会が少ない JFL 環境

のオーストラリアにおいて、日本語学習者は既存の伝統的な教室や教師、コースの枠を超え、クラスコミュニティ内外での日本語コミュニティとの接触を促進させる必要がある。そこで、シドニー日本人居住者コミュニティや世界的な日本語話者コミュニティと接触する機会を作るのが **CoP (Community of Practice)** である。**Intermediate** の学生が **Introductory** のクラスを訪れ日本語で情報を集めるゲストセッション、**Professional** の学生や卒業生が **Introductory** の教室でサポートなどを行う **Jr.先生**、また、日本人を学校に招いて質問などをするゲストセッション、さらに、**Capstone** の授業における、シドニーの日本人居住者コミュニティの人たちの前で行う日本に関するリサーチの発表などがその例である。また、9月にはスピーチコンテストが行われ、毎年多くの学生（今年は5名）が参加しているが、そこでは高校生や他大学の日本語学習者とも交流する。このように、レベル間の壁を越え、さらに学内外の壁をも越えた様々な日本語コミュニティを築くことで、**UNSW** の日本語学習者は様々な日本語に接することとなり、学習動機づけが高まり、自身の考えを明確に表現できるようになり、他者との相互作用の中でどのように自身の能力を高めていけばよいかがわかるようになる。



UNSW Japanese Community of Practice

● クラスのコミュニティ

Lecture は 50 名以上と大人数で授業を行うが、Tutorial や Seminar は 25 名以下と少人数で授業をしている。クラスは日本語学習を個人学習ではなく、クラスメートとの相互作用を通じた学習を促進するため、様々なシステムを導入している。たとえば、Introductory のセミナーは授業の初めにクラスごとの名前をつけ、クラスのアイデンティティを形成す

る。また、学期の途中で行われるインターアクションテストでは、ペアで会話をしたり、グループごとに質問・応答という形をとったり、また発表原稿を学生同士でチェック・コメントをするなど、学生同士が助け合い、協力し合わなければならないテスト形式をとっている。さらに **Introductory** では漢字先生というシステムにより、学生が学生に日本語を教え、ともに日本語能力を向上させていけるような授業システムを導入している。また、時には学生同士が日本旅行の体験や、オーストラリア国内の日本接触体験を共有することで、学生たちはクラスメートと教室の中や教室外、インターネットのスレッド（後述の **Moodle** や **Blackboard 9** など）などを通して相互交流し、日本語能力を向上させていく。

➤ ジュニア先生（Jr.先生）

Jr.先生は、上級（**Advanced** や **Professional**）の学生が下のレベル（**Introductory** や **Intermediate**）の教室に入り、学生の疑問や質問に答えたり、ペアワークで人数が足りないときに代理になったり、また、タスクを行う時にはモデルとして例を示したりなど、多面的に授業をサポートするシステムだ。これは **Jr.先生** となる学生にとっても、また、**Introductory** や **Intermediate** の学生にとっても有益である。**Jr.先生** は自身の日本語能力を評価してそれを生かすことができ、また、自身の弱点を、先生の説明を聞いたり、学生に教えたりすることで克服することができる。また、**Introductory** や **Intermediate** の学生にとっては、**Jr.先生** が日本語学習のモデルとなり、また、先生以外にサポートを受けられる相手となる。また、**Lecture** は学生数が多いため、複数名の **Jr.先生** がおり、一方で **Tutorial** や **Seminar** では通常 1～2 名の **Jr.先生** が授業に参加している。教師・クラス運営の立場から見ると、一人の先生が 20 数名のクラスの一人一人に注意を向けて見まわったり、理解できていない点を一人一人確認したりするのは困難であるため、**Jr.先生** がサポートしてくれるのはとても効率がよい。また、タスクやペアワークなどの説明やデモンストレーションの提示の際には、先生が **Jr.先生** と一緒に例を提示できるため、長く複雑な説明をする必要がなく、学生も理解しやすくなる。**Jr.先生** は単なる授業のサポートという枠にとどまらない、授業に積極的に参与し、先生とともに授業を作り上げていく存在だ。

➤ BB9/Moodle

インターネット上で授業の連絡や課題を提出したり、クラスメートと交流をしたりするのに使われているスレッドが **BB9/Moodle** だ。これらの使用例としては、例えば **Intermediate** の学生では、授業の初めにクラスメート同士がお互いのことをよく知るために、自分の **Tutorial** のクラスのページに日本語で自己紹介をした映像を投稿している。また、作文やパブリックスピーチのドラフトなどを投稿し、先生はもちろん学生同士が読んでコメントや改善案を書き込むのにも使用されている。クラスメートが読むことを想定して、学生にも理解しやすい日本語を考えて書く能力が必要とされる。さらには、授業中に答え合わせできなかった宿題の答え、**Lecture** で聞く日本の曲のリクエストなど、様々な用

途で使われている。

➤ Interaction test

UNSW の日本語教育は、アセスメント実施による学習者の自律的学習を育む取り組みも行っている。**Introductory** のロールプレイテストはその一例であり、定められたテーマ・状況に即してクラスの前で発表しなければならない。テストは学期の中ほどで実施されるため、学期前半で学んだ内容を復習することができる。また、ロールプレイは実際の学生自身の経験や考えなどを使ってできる内容となっており、学生の生活体験とかけ離れたものではなく、自身の実体験や日常の生活等を表現できる。テストは二人一組になって行うのだが、ペアごとに目標を設定し、授業時間外に協力して内容を決定し練習をするので、お互いに助け合いながら協働学習を行うこととなる。ペアワークであるため、相手に迷惑をかけられないという責任感が生まれ、能力の低い学生はペアの力を借り、実力のある学生はペアのクラスメートを助けながら、協力し合ってテストの準備をする。このように、学習者が自ら目標を設定し、それに向かってクラスメートたちと共に努力し合うプロセスは、学習者の自律性を育むものである。

Intermediate Japanese の場合は、学期末にパブリックスピーチアセスメントがある。学生は学期全体を通してテーマを決め、数回ドラフトを提出し、発表練習を行い、徐々にステップアップしていく。これらは全てクラスメート・教師・Jr.先生などと協力し合いながら行われる。例えば、学生が書いたドラフトは **Moodle** のクラスのサイトにアップし、学生同士が互いに読んでコメントや修正点などを書く。こうすることでお互いにスピーチ内容を改善していくとともに、お互いが何について発表するのか予め知ることができるようになっている。

3 担当授業での活動

3-1 Introductory Japanese B

- 担当教官：福井先生、トムソン先生
- 実習生：ガルマーエヴァ オリガ、西澤真奈未
- 実習の目標

今回の実習の目標として、二点を挙げた。日本語教師としての経験を積むことと、コミュニケーション重視の日本語教育および学習者主体教育の特徴を体験すること。

- 担当のコース

今回の実習では **Introductory Japanese B** のコースを担当した。このコースは、1 年生を中心とした初級コースであり、週 5 時間（講義 2 時間、チュートリアル 1 時間、セミナー 2 時間）となっている。コースの時間割は以下の表 1 に示す。

<表 1> Introductory Japanese B の時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | | 金 |
|---------|-------------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 9 : 00 | | | | Seminar 1 上田 | | Seminar 6 橋本 |
| 10 : 00 | Lecture 1 トムソン | Tutorial 1 松井 | Tutorial 6 福井 | | | |
| 11 : 00 | | Tutorial 2 松井 | Tutorial 7 福井 | Seminar 2 上田 | Seminar 3 福井 | Seminar 7 橋本 |
| 12 : 00 | | | | | | |
| 13 : 00 | | | | | | |
| 14 : 00 | | Tutorial 3 松井 | Tutorial 8 福井 | Seminar 4 福井 | | Seminar 8 福井 |
| 15 : 00 | Lecture 2 トムソン | Tutorial 4 松井 | | | | |
| 16 : 00 | | Tutorial 5 松井 | | Seminar 5 上田 | | |
| 17 : 00 | | | | | | |

Introductory Japanese B は後期のコースで、Introductory Japanese A のコースを終えた学生向けのものであり、人数が最も多い。使われている教材は『Nakama Book1 b』（Hatasa 他著, 2008, Heinle）の教科書とワークブックとコースノートである。Lecture は毎週月曜日に 2 コマ行われていた。トムソン先生が講義を行うが、トムソン先生以外にも Introductory に携わる先生方が全員参加していた。Lecture の資料は毎週 BB9 にアップされ、学生が予習できるように提供されている。授業の流れは、Lecture で新しい内容を導入した後、Tutorial と Seminar で復習することからなっている。教壇実習は福井先生が担当なさる水曜日の Tutorial 6～8 と木曜の Seminar 3～4 で行わせていただいた。また、教案のチェック・助言・実習直後の反省会は福井先生にいただいた。

クラスには福井先生と私たち 2 名の実習生のほか、1～2 名の Jr.先生がおり、また漢字学習の際には漢字先生というシステムがあった。漢字先生は、漢字の得意な漢字圏の学生がそうでない学生に漢字を教えるシステムである。学生 1～3 名ほどに一人の漢字先生が付き、新出漢字の書き方や意味について一つ一つ丁寧に教える。そして他の学生は漢字先生の横で漢字を書いてみる。漢字先生に漢字を教わっているときは、普段は積極的でない学生やあまり熱意が見られない学生も普段とは見違えるほどのまじめさを見せていた。同じ学生であるクラスメートに隣で教えてもらうことによって、学生がより真剣に授業に取り組んでいるように感じられた。また、漢字圏の学生は漢字を書くのは強いが、読みは弱い。クラスメートである学生に漢字を教えることで、自身も漢字の読み方を学ぶことができる。

● 教壇実習

今回、実習生は大学の後期の第 5 週から授業に入ることになった。表 2 のスケジュールは、授業の内容と実習で行ったことである。

<表 2> Introductory Japanese B : 実習期間に実習生が行った活動

| | 主なテーマ | 実習生が行ったこと | |
|-------|-------|---|---|
| | | Tutorial | Seminar |
| 第 5 週 | 買い物 | 数詞の練習 15 分 | デパートと町中の店の会話文の比較 15 分 |
| 第 6 週 | レストラン | 「日本人が一番好きな食べ物」ゲーム 20 分 | レストランで注文をする会話の練習、注文する練習 40 分 |
| 第 7 週 | 家族 | 宿題チェック、家族の呼び方、ペア活動 60 分 | インターアクションテスト (採点・タイムキーピングの後、授業以外の時間に先生とパイロットマーキング) |
| 中休み | | | |
| 第 8 週 | 人の描写 | 宿題チェック 20 分、家族について紹介した文を読み、家系図を制作、メモをとり、パートナーに説明するタスクを担当 40 分 | 宿題チェック、人の描写の練習、ロールプレイ 120 分 |
| 第 9 週 | 天気 | 宿題チェック、「フラットメートを選ぶ」タスク 60 分 | 宿題チェック、家族の写真を使い、パートナーに説明する「～する人」の名詞修飾の練習 60 分 |

Introductory は最初から教壇実習に携わり、二人の実習生が分担しながら交代で行った。最初の第 5 週の Tutorial で 15 分のアクティビティを担当し、徐々に担当時間を増やし、最終的に 2 時間のセミナーを担当した。また、第 9 週のチュートリアルで使われるタスクも

作成した。

実習はトムソン先生から事前にメールで教案をもらい、それに沿って自分用の教案を作ることから始まった。台詞が入った 3～5 分単位の教案を福井先生に見てもらい、必要ならば修正し、最終版を改めて先生に送るという準備をした。今回は、Introductory に二人の実習生がいたため、チームワークも求められていた。お互いの教案を見たり、分からないことがあったら話し合ったり、最後のタスクを二人で作るというチームワークで行った。

授業の大きいテーマの中で、必要な文献や語彙を導入し、実際にコミュニケーションが起こるように練習する。

第 7 週の Seminar はインターアクションテストであった。このインターアクションテストは、学生が何週間か前から準備している大きな課題である。ペアごとに設定された場面で会話をするという課題で、評価される項目には、文法や語彙の適切な使用だけではなく、ディスコースの展開、あいづちの使用なども含まれている。今回は、実習生は直接採点に携わっていないが、先生方のパイロットマーキングを見学した。パイットロマーキングは、それぞれの教師の判断に基準を作るためにセミナーの先生が集まり、何人かの学生の録音を聞き、一緒に採点する作業である。

最後の第 9 週の実習は、それまで Introductory 担当の福井先生による教案に沿って行われたのに対し、実習生の作った教案ですべての Tutorial で実施することになった。「～ている人」の名詞修飾の練習になるようなタスクを作る作業は二人の実習生に任せられた。文型の練習を中心にせず、学生が実際に使えそうな場面設定をして、タスクを設けるのは非常に難しかった。何回も修正した結果、「フラットメートを選ぶ」というタスクを作り、Tutorial で実施した。タスクはフラットメート候補者 2 名の自己紹介文を読み、「～ている人」という形でメモを取り、パートナーに説明した後、どちらをフラットメートにしたいか選ぶというものである。また、第 9 週のクラスで学生による教師の評価を得るために授業でエヴァリュエーションシートを配った。

3-2 Intermediate Japanese B

- 担当教官：飯田先生
- 実習生：吉田綾
- 実習目標

自分のなりたい日本語教師像を具体的に描けるようになること。

- Intermediate の授業構成

Intermediate は、主に 2 年生を対象に行われている。授業は、月曜午前中の Lecture (2 時間) と、月曜～木曜に毎日ある Tutorial (2 時間) の 4 回のうち 1 コマを選択するという形で構成されている。学生は一週間で Lecture の 2 時間、Tutorial の 2 時間、計 4 時間の授業を受ける。Lecture では Intermediate の学生は (2012 年は約 60～70 名) 文法やそれに関連する日本の文化、漢字の導入を学ぶ。この Lecture を基礎とし

て、Tutorial では学生が習った文法事項などを練習する。Tutorial の学生数は 1 クラス 15～20 名程度である。以下の表 3 に一週間の授業の時間割を示す。

＜表 3＞ Intermediate Japanese B の時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---------|------------------|------------------|------------------|------------------|---|
| 10 : 00 | Lecture 飯田 | | | | |
| 11 : 00 | | | | Tutorial 4 飯田 | |
| 12 : 00 | | | Tutorial 3 中村 | | |
| 13 : 00 | | Tutorial 2 中村 | | | |
| 14 : 00 | Tutorial 1 飯田 | | | | |
| 15 : 00 | | | | | |
| 16 : 00 | | | | | |

- 授業外で同時進行する Public speech

Intermediate では学期を通して、学期末に行うクラスメートの前で言うスピーチ、Public speech の準備を進めている。実習生が実習を始める第 5 週の時点で、学生はクラスメートと話し合って自分のスピーチのテーマを決め、2 分半～3 分のファースト・ドラフトを作成していた。そして、それらドラフトを締め切りまでに Moodle にアップし、Moodle の掲示板でクラスメートにコメントし、ピア・レビューを行っていた。第 7 週に行うインターアクションテストは、このスピーチ準備の中間発表とテストの役割を兼ねている。学生は Moodle でピア・レビューを行っているため、クラスメートのスピーチの内容に関して、ある程度内容を把握しているという前提でインターアクションテストは行われる。Moodle は、日本語の勉強やスピーチの内容の事前の把握だけでなく、普段話すことの少ないクラスメートの顔を知り交流を深めることで、クラスコミュニティを形成する目的・効果もある。

- Intermediate の授業で行った実習

第 5 週～第 7 週は、Lecture も Tutorial も、主に授業を見学したり、アクティビティ中の学生の質問に答えたりなど、補佐を中心に行った。第 8～9 週では、実習生が作った教案を元に、Tutorial で 2 時間の授業を計 4 回行った。以下の表 4 に、第 5 週～第 9 週までのレクチャーとチュートリアルの内容、実習生が行ったこと、また実習生が授業外で行ったことを示す。

＜表 4＞ Intermediate Japanese B：実習期間に実習生が行った活動

| | Lecture | Tutorial | 授業外で実習生が行ったこと |
|-------|--|--|---|
| 第 5 週 | 日本の近所付き合い、受け身「～れる・～られる」、使役の受け身「～させられる」、漢字 | 使役の復習、受け身動詞、使役の受け身動詞の練習 | 学生 4 名の Public speech でのドラフト（原稿）添削。また、Moodle で学生のドラフトに対してコメントを行う。 |
| 第 6 週 | 効果的で適切な苦情の伝え方、「ようにする」「～まま」「～ても」「～のに」、漢字、いじめの読み物 | 「ようにする」「～まま」「～ても」「～のに」を練習、いじめの読み物の続き | |
| 第 7 週 | 伝統的な日本の雇用システム、礼儀の示し方、尊敬語・Polite instruction / request（「お～下さい」）の導入、漢字 | インターアクションテスト（カメラ、録音機器の準備、実習生は司会進行役を担当） | |
| 第 8 週 | 日本の求人広告の紹介、日本の履歴書の紹介、謙譲語・丁寧語、漢字。後半で、実習生が作成した尊敬語・丁寧語・謙譲語のプリント | 実習生の教壇実習：Writing・Listening テスト、第 6 週のいじめの読み物の答え合わせ、尊敬語・Polite instruction・丁寧語・謙譲語の練習 | |
| 第 9 週 | 敬語、「の」と「こと」、「～も」の導入、漢字 | 実習生の教壇実習：「の」と「こと」の練習、「ことにする」と「ことになる」、「～も」の練習。後半で Professional B の学生が Intermediate の学生にアンケートを実施。Intermediate の学生は Public speech のドラフトを読み、コメントをもらった。 | |

● 第 7～9 週の教壇実習

第 7 週の Tutorial では、インターアクションテストを行った。インターアクションテストでは学生は 4 名程度のグループになって前に出て、一人がドラフトの要約を 1 分間日本語で発表し、それに対して残りの三人が日本語でコメントや質問を行った。他の学生・教師はこれを見て評価を行う。その際実習生は、準備や、テスト中のファシリテーター、またタイムキーパー役を担当した。

第 8～9 週では、実習生が作成した教案を用いて、飯田先生担当の Lecture と Tutorial で授業を行った。Lecture では、敬語の練習など授業の一部で教壇実習を行った。Tutorial

は 2 時間授業を行った。授業の内容は飯田先生と相談したが、文法項目の説明の仕方、タスク、その説明は実習生がまず考え、それに対する先生のアドバイスをいただきながら作成した。中村先生が担当なさっていた火曜と水曜の **Tutorial** では、実習生の教案を元に授業を行っていただいた。また一週間の流れとして、二週とも、教案は授業のある前の週に提出し、修正を加えた。さらに月曜に **Tutorial** で授業を行った後、火曜と水曜の中村先生の授業を見学し、月曜の反省点と中村先生の授業・アドバイスを参考に教案を修正してから、木曜の **Tutorial** で授業を行うという流れで行った。

第 8 週の **Lecture** では、**Lecture** の後半で実習生が作成した尊敬語・丁寧語・謙譲語のプリントを実施し、答え合わせを行った。**Tutorial** では、**W (Writing)・L (Listening)** テスト、第 6 週のいじめの読み物の答え合わせ、尊敬語・**Polite instruction**・丁寧語・謙譲語の練習を行った。敬語の練習は、**Lecture** の復習として普通体の敬語への言い換え練習と、学生が実習生に対して敬語を使って質問をするタスクを行った。

第 9 週の **Tutorial** では「の」と「こと」の練習、「ことにする」と「ことになる」の練習、「～も」の練習を行った。タスクとしては、学生の今週の予定、その場で決めた予定を「ことになっている」「ことにする」を使って言い表す練習をペアで行い、発表してもらった。さらに **Tutorial** 後半では **Professional** の学生が教室に来て、日本語調査プロジェクトの一環として **Intermediate** の学生にアンケートを取った。これに対して **Intermediate** の学生は **Public speech** のドラフトを読み、コメントをもらった。この週は、飯田先生とだけでなく、**Professional** 担当の橋本先生ともアンケートの内容の確認など、事前に打ち合わせを行ってから、教案を作成した。

- 授業外の実習

- Moodle にアップされたドラフトへのコメント

Moodle にアップされたドラフトには、クラスメート同士がコメントし合うが、コメントを少数の学生からしかもらっていない学生には実習生がコメントをした。このコメントを行うことで初めて学生の関心事やテーマなどを知り、また名前を覚えることもできた。

- 学生のドラフトの添削

学生が先生に提出し、先生が添削するドラフトの一部の添削を行わせていただいた。添削の方法は、飯田先生が既に添削したワードのファイルにあるコメントを参考にして、4 名ほどのドラフトの添削を行った。この際、学生に答えを明示的に与えるのではなく、どこがどう間違っているのか、考えさせるという視点からコメントを与えることに注意した。

3-3 Advanced Japanese B

- 担当教官：岡本先生
- 実習生：佐々木馨

- 実習目標

修士課程終了後、海外で日本語教師となるために必要なことは何か知る。

- 担当のコース

- ・3年生を中心とした中級コースであり、Lecture と Tutorial からなる週 2 コマとなっている。受講生は約 100 名程度で、各 Tutorial は 20～25 名程度で構成されている。学生は授業時間外にプロジェクトとして日本語能力試験（JLPT）対策、カラオケ発表等の中から各人で選択したものに取り組んでいる。コースの時間割は以下の表 5 の通りである。Lecture は座学で、このコースを受講している学生が全員出席する。教科書（『中級から上級への日本語』鎌田他著, 1998, ジャパンタイムズ ※来年度から変更）とコースノートの内容の他に毎週ディクテーション、漢字先生の活動、カラオケプロジェクトの発表がある。
- ・漢字先生は初級のクラスとは異なり、各週にあらかじめ先生となる学生を決め、その人数分のグループを作って行う。先生となる学生は担当の範囲の漢字について学習できるよう各々工夫した教材を作成する。
- ・Intermediate が終わった時点で日本へ留学する学生も多く、日本について自身の体験を話してくれる学生も少なくない。実習期間中に JLPT の案内があったが、このコースを受講している学生は N3～N2 を目指すという。

<表 5> Advanced Japanese B の時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---------|---------------|----------------|----------------|---|---|
| 9 : 00 | | | Tutorial 岡本 | | |
| 10 : 00 | | Tutorial 岡本 | | | |
| 11 : 00 | | | | | |
| 12 : 00 | | | | | |
| 13 : 00 | | Tutorial 大浜 | Tutorial 岡本 | | |
| 14 : 00 | Lecture 岡本 | | | | |
| 15 : 00 | | | | | |
| 16 : 00 | | | | | |

- 教壇実習

期間中、主に Tutorial の時間で実習をさせていただき、期間のはじめから少しずつ実習時間を増やしていった。

Lecture では毎週行われるディクテーションを担当させていただいた。

期間中インターアクションテストが行われた。そこではそれほど親しくない人のお宅に初めて訪問する場面が設定されており、テスト前の授業では模範を示した。また、ディクテーションテスト、インターアクションテストの採点も行った。

第8～9週には1コマすべてを担当させていただいた。担当した内容は、第8週は主に新聞の内容の読解と第9週に行われるゲストセッションに向けての準備、第9週はゲストセッションである。

教案の作成ではアイデアの段階から自分の考えを岡本先生と共有し、今までの授業で取り組んできたことなども教えていただきながら前の授業とのつながりを意識した。毎週先生とのミーティングがあったので、その都度できているところまでを見ていただくことができた。

実習期間は、火曜日の午前中に岡本先生のクラスで一度自分で授業をし、その後大浜先生の授業を見学させていただいた。そして、それらを踏まえて自分の授業の問題点を挙げ、水曜日の2クラスへと授業の改善を試みた。

ゲストセッションはシドニー近郊に滞在している日本人をゲストとしてお招きし、セッションを行った。学生たちは今学期取り組んだ日本の大学生生活、就職活動について質問をすることによって、今学期の授業内容を深めることもできるようになっていた。教師としてはゲストが全員来るか、教室の変更で学生が教室を間違うのではないか、椅子の配置はどうするかなど予期せぬ事態にそなえて臨機応変に対応することが求められた。

● 授業外での活動

教壇実習のほかに、ディクテーションテストとインターアクションテストの採点をさせていただいた。どちらも基準を提示していただき、まずは自分で採点をしたあと、採点の仕方に問題がないか岡本先生に見ていただいた。また、学生へのフィードバックも作成した。インターアクションテストの採点については岡本先生、大浜先生と私の3名で同時に何人かの動画を確認し、点数のずれが生じないように基準を作っていく過程にも携わらせていただいた。その後個人で採点を行い、岡本先生のチェックを受けた。

<表6> Advanced Japanese B：実習期間に実習生が行った活動

| | Lecture | Tutorial | 授業外で実習生が行ったこと |
|-----|----------|---------------------------|---------------------|
| 第5週 | | インターアクションテストに向けて | |
| 第6週 | ディクテーション | 依頼を断る インターアクションテストに向けて | ディクテーション テストの採点 |
| 第7週 | ディクテーション | インターアクションテスト | インターアクション テストの採点 |
| 授業休 | ディクテーション | | |
| 第8週 | ディクテーション | 新聞記事の読解 ゲストセッションに向けて | |
| 第9週 | ディクテーション | ゲストセッション | |

4 担当授業以外で参加した授業について

今回の実習では、Capstone, Contemporary Japan (Lecture , Tutorial), Professional B, Representation of Japan に参加した。

● Capstone（担当：飯田先生）

参加者は Professional や Advanced クラスの学生約 30 名であった。シドニー在住の日本人を招待して行う 10 月の日本研究発表会に向けて、学期を通してテーマごとに分けられたグループで授業と授業外で研究を進める。第 6 週の中間発表時点でのテーマは以下の通りであった。

- ・「オーストラリアに住んでいる日本人の文化適応」
- ・「日本人とオーストラリア人の健康意識の比較」
- ・「どうして日本人のお笑いは面白いのか明らかにすること」
- ・「日本のアイドル文化」
- ・「メイド喫茶」
- ・「病んでいる日本の社会」

研究の進め方は、主にインターネットや日本に関する日本語の論文から情報を集め、それらを元に自分たちの考察を行うというものであった。一部のグループでは、論文の理論を引用し、日本のお笑いの面白さを解明しようとする画期的な試みをしていた。また、シドニーにいる日本人へのアンケートを行うことを予定しているグループもあった。実習期間中の授業では、主にグループでの話し合いによる発表準備、および中間発表として各グループの発表が行われた。中間発表当日は、準備や司会進行なども、学生が担当するため、授業内においても本番さながらの発表練習を行っていた。

実習期間内は、学期末の発表の準備を主に手伝った。グループでの話し合いにおいては、実習生は各自でグループをまわり、日本語や発表内容、例えば発表内で扱う内容の量は適切か、筋が通っているか等に関してのアドバイスを行ったり相談にのったりした。また、学生は発表に関連したテーマのレポートも課されているため、それに対するアドバイスも行った。中間発表時には、各グループの発表に対して、研究目的、研究方法など研究の基本的な構成が整っているか、発表は分かりやすいか、発表の仕方は適切か、などコメントを行った。

● Contemporary Japan（担当：アーマー先生）

授業の内容は、現代日本の文化、特にサブカルチャーが主に扱われていた。Lecture では、その週のテーマに関する資料や、観点について講義を行っており、約 30 名が参加していた。Tutorial では毎回、学生が 4～5 名のグループを 4 組ほど作った。そして Lecture で扱われた内容に関して復習した後、それに関連するテーマまたは新しいテーマに関して、グループ内で意見を出し合い発表を行った。Lecture と Tutorial で扱われたテーマは、「草食系男

子」「3K（きつい、汚い、危険）」「高齢化社会」「日本経済の不景気」「クールジャパン」「オタク」「ロリータ」「日本の交通（地下鉄網など）」「嵐」「ネオ・ナショナリズム（澤穂希）」「日本が今後世界に売り出すものとは」などである。

実習生は **Lecture** には講義を聞く形で参加した。**Tutorial** では、適宜 **Contemporary Japan** 担当のアーマー先生から、日本についての質問を受けた。また実習生は各グループの中に入り、話し合い時に設けられたテーマについてディスカッションに参加したり、学生の現代の日本に関する質問や考えについて答えたりした。

- **Professional B（担当：橋本先生）**

今年度は、**Professional** の担当としては実習生が入らなかったが、日本に住む学生として **Professional B** の授業に適宜参加させていただいた。

第 6 週 の 8 月 23 日は、授業で若者言葉を扱っていたため、現在の日本の若者言葉に関して、プリントを参照しながら、それらを現在自分たちが使用するかしらないか、また、どんな状況で使用するかについて質問を受けた。さらに、擬態語・擬音語に関しても、それらを使用するシチュエーションなどについて質問を受けた。

第 8～9 週の 授業外では、**Professional** の学生と会い、一対一で日本のニュースに関して 10～20 分のディスカッションを行った。学生はこれをもとに 800 字程度のレポートを作成する。テーマは、「避難住民に肥満傾向」「奈良金魚すくいの全国大会」「原子力発電所の問題」などであった。

Professional B の学生はこの学期中、「日本語調査プロジェクト」を行っていた。これは、学生が日本語について設けたテーマに関して、日本語に関わる様々な人々に調査を行うというものである。第 9 週（実習最終週）のこの授業に、実習生はシドニーに短期・長期滞在する日本人と共に参加した。当日は各グループに実習生を含む日本人が入り、敬語（頻繁に使用する敬語、敬語に関する考え）、漢字（漢字をどのように学習してきたか、分からない漢字を調べるか）、四字熟語、漫画で日本語を学ぶこと、俳句を作るかなどの学生からの質問に答えた。

- **Representation of Japan（Lecture, Tutorial をアーマー先生と飯田先生が毎週交代で担当）**

Lecture は週 1 回 1 時間、**Tutorial** は週 2 回 2 時間ずつ行われた。**Lecture** と **Tutorial** の内容は共通するものが多く、ここでは実習生が参加した授業の内容をまとめて紹介する。**Lecture** と **Tutorial** で多く扱われたのは、戦後の日本文化についての紹介である。例えば、戦後の力道山やゴジラと言った日本の大衆文化、またラジオからカラーテレビ、CM やテレビ番組といったマスメディアの時系列に沿った変化を紹介していた。また、**Tutorial** の授業では、学生が設けたテーマについて、ペアになり、7 分間で口頭プレゼンテーションを行うという活動があった。他にも、学生が 4 名ほどのグループになり、日本のヤクザ映画やア

ニメーション映画、また万国博覧会のテレビ番組などを見て、意見をまとめるといった活動も行われた。実習生は、授業を聴講したり、先生の質問に答えたり、またグループ活動中は学生の活動を見学したり討論に参加するなどした。

5 授業外の活動

● 学内の活動

週に1回行われるトムソン先生のゼミで、大学院生主催の勉強会に参加した。院生が集まって、それぞれの研究報告、学会への準備、文献の読書などを行った。

● 学外の活動

実習期間の後半、9月半ばから後に、国際交流基金へのあいさつ、土曜校見学、日本語のバイリンガルプログラム実施校の見学などを行った。土曜校とバイリンガルプログラム実施校の見学は、国際交流基金に勤めているお茶の水女子大学大学院のOGの方と連絡を取り、その方の紹介で実現した。

➤ 国際交流基金へのあいさつ

➤ 土曜学校 (Camberay Public School) の見学 (2回)

土曜学校の小学生の学級には各学年複数クラスがあった。子どもたちは、平日は現地の学校に通い、土曜の午前中だけはこの土曜学校に通っている。子どもたちは、日本生まれや家族に日本人がいるなど、日本にルーツを持つ子どもであった。

Camberay Public School で行われている土曜学校は、現地の土曜学校では珍しく、日本の文部科学省検定済の国語の教科書、すなわち日本の学校で使用されているものと同じ教科書を使用していた。このため、現地の先生によると、Camberay Public School の土曜学校は日本人保護者から信頼され、シドニーで一番の評判を誇る学校であるという。9月15日の初回の見学では、土曜学校のスピーチ大会に出席させていただいた。大会では各学年1名ずつの代表児童生徒が各自のテーマについて、この日のために練習してきたスピーチを行った。9月22日には土曜学校の幼稚園、小学校2、4年生、中学校2、3年生の授業を約20分ずつ見学した。この土曜学校には UNSW の日本語コースの非常勤の先生も参加されており、シドニーの日本人・日本語コミュニティを見ることができた。

➤ 日本語バイリンガルプログラム実施校 (Murray Farm Public School) の見学

Murray Farm Public School はシドニーで唯一日本語バイリンガルプログラムを実施している学校である。学校自体は地元の子どものための公立の学校であるが、希望する子どもで日本語のバイリンガルクラスを編成している。このクラスでは、英語の通常の授業がある一方で、一部の授業では日本人教師が日本語を使って授業を行っていた。継承語ではなくバイリンガルを育てるためのプログラムであり、見学当時このプログラムは実施3年目、教員はボランティアも入れて4名であった。

見学を行ったのは、幼稚園クラス、2年生クラス、3・4年生合同クラスである。幼稚園クラスには20名弱の子どもがおり、主に日本人の子どもと同じように踊りや歌を交えて日

本語を勉強していた。2年生のクラスでは、ひらがな、カタカナの歌を交えた発音練習、この日は特にマ行の書き方の練習、年齢の言い方や、「いえでなにをしますか」「_____は、いえで_____をします」と言う練習などを行っていた。また、3・4年生はグループで宇宙をテーマにした絵を描き、授業の最後に日本人教師がそれらを発表した。日本人教師は、「座って」、「漢字ノートの練習をする」などボディーラングージを用いながら子どもに日本語で指示を与えており、また発表も日本語を交えて行っていた。このように、日本人教師が身ぶりと手ぶりを加えながら、日本語を使って説明や指示を行っていた様子が印象的だった。

➤ スピーチコンテスト

UNSW の日本語教育は、授業以外の場での活躍や成果も生み出している。年に一度、9月に開催されているスピーチコンテストは、NSW 州で1位になると全国大会に進むというシステムで行われているが、UNSW の日本語学習者は州大会・全国大会でとても優れた成績を収めている。

今回実習生は2012年9月15日にマッコーリー大学で行われた第43回日本語弁論大会（NSW 州大会）を見学することができた。大会は4部門（高校生、ビギナー、一般、継承語話者）からなっているが、UNSW の学生はビギナー、一般、継承語話者の部門で一人ずつ発表した。

発表者は自分でテーマを選び、スピーチを作成し、指導の先生と練習するという準備がある。UNSW では、さらに大会直前になると、発表者は日本語の授業で後輩や先輩の前で自分のスピーチを練習していた。それは、発表者自身の練習にもなったし、他の学生にも動機や関心を与える機会でもあった。

大会当日、発表者とその応援者、審査員、日本大使館の関係者、日本語の教師や日本語を習う学生などが数多く集まってきた。スピーチのテーマは様々だったが、UNSW の学生のスピーチは、「彼女のお母さんは日本語の先生」、「自立生活から学んだこと」、「私はケチケチ関西人」であった。

審査員は日本語教育に関わる先生方だった。評価は、「内容・発表の仕方・言語・Q & A」の観点から総合的に行われた。

今回は、高校生部門を除く三つの部門でUNSW の学生が1位となり、この3名は全国大会でも優勝した。

6 実習を通して学んだこと

● ガルマーエヴァ オリガ

今回の実習で設けた二つの目標は達成された。まず、今まで日本語教育の経験がなかった私は、5週間にわたって実際に大学で教える経験を得た。その際、授業で使う教案を作ること、学生に初めて会って授業を進めること、他の先生とやり取りをすることなどの活動に初めて参加できた。

コース全体の流れを理解し、教室活動の目的を考えながら教案通り授業を進めようとすると、実際の教室では予想外のことが起きたり、学生の反応がなかったりもした。その場合、臨機対応が必要であり、状況に応じて教案を変えたり、タスクを省いたりすることで成功できるのだと体験できた。

二つ目の目的、コミュニケーション重視の教育、自律学習を促す教育について知ることでも達成できたのではないと思う。特に、教室の中で教えないで、学習が起きるように指導するという教師の役割についてはじめて知り、それに合わせてどういうふうに授業を進めるのかと考えながら実習をしてみた。今まで受けてきた外国語教育と全く違う教育のあり方を知って、これから教師になる自分はどのような教育に携わっていきたいかについて考えるようになった。「先生」から「学生」への一方向的、垂直的な教育ではなく、「人間と人間」という関係を築く教育の考え方が心に残った。具体的なレベルでは、タスクの作成、学生とのやり取りなど教室活動でとる行動に反映することであるし、抽象的なレベルでは、教育に対する理解や価値観に影響することである。

また、実習の際、どこをもっと勉強しておくべきか、どこに注意をしたほうがいいのかについてはっきりわかった。教室活動の進め方、タスクの種類とそれらの目的の理解、時間配分、英語での説明などについて、もっと勉強しておけばよかったと思う。また、オーストラリアの日本語教育の事情についても勉強が足りなかったと感じた。今回の実習は初めての経験として非常に有意義な実習だったと思う。特に、海外で日本語教育を受けた私にとっては、学習者としての経験と今回の新しい経験を比べることができた。その違いを念頭に置いて、自分がなりたい教師像はどのようなものなのか、また自分でどのような教育を作っていけるかについてよく考えさせられた。教師の視点だけでなく、学習者はどのような人なのか、なぜ日本語を勉強しにくるのか、という要因が非常に大きいと自覚した。

● 佐々木 馨

実習のなかでどのような教師になりたいか、どんなクラスをつくっていきたいか、ということを考えた。そこで感じたのは、理想の授業を頭の中で思い描いていたとしても、実際にその通りにはならない、ということである。

私は学生が自分で考えられる、知的好奇心を満たすような授業がしたいと思っていた。また教師としての信頼を得るために、正確な説明をできるように準備をしたつもりだった。しかし、実際には私の説明では理解してもらえないことが多々あり、学生が考える授業どころか何をやっているのか分からないような授業になってしまった。この活動の目的は何か明確にせずに、この教材ならこんな工夫ができるのではないかということを考えても仕方がないのだということを身をもって体験した。もちろんきちんと説明できるように勉強していくことも必要なのは言うまでもない。そのうえで問題が発生したときに一人でなんとかしようとするのではなく、理解している学生を頼ったり、持ち帰って調べる、相談するなりして私なりの答えを次の授業できちんと伝えるということをアドバイスいただき、意識してからは私自身の心的負担も軽減したし、学生も少しは納得してくれたように感じた。このことから授業は教師一人で作るものではないということを学んだ。

また、先生方の姿を見ていて、最初は授業・学生に関することに、なぜこんなに多くの情報を共有するのか、時間もかかるし教師の負担も増えるだけなのではないかと疑問に思っていたが、先生方が誠実に学生と向き合い理解しようとする、些細なことでも教師同士で共有していることは、学生からの教師に対する信頼につながってくのだと実感することができた。

教師の役割としてもう一点印象に残っているのが「学習システムをつくる」ということである。私が入った **Advanced** のクラスにはプロジェクトの一つに「カラオケプロジェクト」があった。学生がカラオケの PV と、歌詞の中から新出の語彙リストや聞き取り問題を作り、クラス全員の前で発表するという活動は学生が授業では見せない一面を知ることができたり、学生同士の学びにつながる活動である。教師が直接介入しなくても学生同士で日本語の学習ができること、そのことによる利点も実感することができた。

また、ディクテーションテストやインターアクションテストの採点をさせていただいた。そこで考えさせられたのは、学生が書いたり、話したりする日本語に誤りや違和感があつたときにどの場面でどこまで許容するのか、いつどのように指摘するのかということである。これは私の教師観に関わることである。学生が一生懸命やっているのが伝わってくるし、自分が第二言語で言いたいことが言えるわけでもないで「意図は伝わる」ということで良しとしてしまいそうだが、それでは単なる日本語母語話者でしかない。教師が目指すのは、「教養のある日本語話者」へと学生を導くことなのだという岡本先生の言葉が印象に残っている。

岡本先生、大浜先生にはお忙しい中、多くの指導をしていただき本当に感謝している。この場を借りてお礼を申し上げたい。

● 西澤 真奈未

実習の成果としてまず、UNSW での実習を通して「自律的学習」について学ぶことができたことが挙げられる。Jr.先生や漢字先生、スピーチ原稿のピアサポート等、学生同士が互いに学び合える関係や、学年をまたいでの関係構築している学習システムはとても新鮮であり、とても有意義な学びとなった。学生同士が共に教え合うことのできる、また JFL の環境の中で、学生の日本旅行経験やオーストラリアで触れられる日本文化など、学生のあらゆる体験を日本語学習に役立てている教室は非常に創造的だと感じられ、心に残った。実習を通して、学生が主体的に学べる環境・システムを教師が作り、学生たちがその中に入ることができれば、学生たちは主体的に、相互に影響を与え合いながら学習できるという自律的学習の考えを身をもって学ぶことができた。

また、自分一人で仕事をするのではなく、周りの意見を取り入れ、協力しながら授業を作るという姿勢を学んだ。実習期間を通して先生に何度も注意を受けたのが、一緒に Introductory に入ったオリガさんと協力するということであり、それがなかなかできなかったことが私の反省点でもあった。UNSW の日本語教育は、先生方のネットワークが素晴らしいだけでなく、Jr.先生や学生たち全員が一丸となって授業を作っている。一人で行えることはたかが知れており、一人でなんでもやろうとすることは一人よがりにもなる。タスクを作るにしろ、教室でタスクをするにしろ、周りの仲間と協力し、様々な考えを取り入れ、力を合わせることでより良い授業を作っていくのだということを学んだ。

JFL 環境での日本語教育を体験して感じたことは、まず日本語と英語の使い分けが非常に難しいということである。大切なところは英語で言いながらも、学生のレベルに合わせて、日本語でも十分に理解できるところ、だいたいの意味が分かればいいところなどを見極めて、日本語のインプットを与えなければならない。英語が満足に使えない中で、日本語と英語を状況に応じて判断し使い分けていかなければならない JFL 環境での日本語教育の難しさを実感した。さらに、海外で日本語を学ぶ学生と接することができたことは、私の JFL の日本語教育に対する考え方や自分の将来の展望に大きな影響を与えた。実際にオーストラリアへ行く前は、日本語専攻ではない学生が多いことや、日本語の必要度がそれほど高くない JFL 環境という点に不安があった。しかし、実習に参加することで日本語を熱心に学ぶ学生や日本のポップカルチャーに関心を持っている学生、日本旅行などによって日本との直接体験を持つ学生が多いことを知り心が救われ、それが実習中のモチベーションとなった。

このような実習を通して、漠然としていた日本語教師という夢に対して、絶対にこの仕事をしていきたい、そして、そのときには、UNSW のように授業に携わる者全員が強いネットワークでつながり、互いに学び合うことのできる教室を創造していきたいと思えるようになった。JFL 環境での日本語教師の体験は、日本にいる学生という立場ではなかなか経験できないものであるため、このような機会に恵まれたことを本当にうれしく思う。

福井先生、トムソン先生、松井先生、上田先生、Lin さんには担当授業の Introductory で大変お世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。

● 吉田 綾

UNSW の実習は、実習直後だけでなく、現在に至っても自分の教師像や研究の姿勢に大きな影響を与えてくれている。特に実習最後の 2 週間で教壇実習を行い教師の立場に立てたことが、仲間と協力することの重要性、日本語教師がプロフェッショナルの仕事であること、学生のために授業をすることの大切さを教えてくれた。

教壇実習では、内容の打ち合わせから、教案の作成・修正、授業の実施まで多くのことを経験できた。しかし、日本語を学習者に教えるということは全くの初めてであったため、文法の説明の仕方や、タスクの作り方、授業の進め方まで、多くは分からないことばかりであり、先生のアドバイスや授業を参考に教案を修正していくことで精一杯であった。だが、後に UNSW の先生方や実習生の仲間から、全てを自分で背負い込まずに、実習生や先生にアドバイスを求めたり経験を共有し合ったりなどして、負担を減らすこともできたのではないかという指摘を受けた。これは私の独りよがりになりがちな性格を指摘してくれたことでもあるのだが、同時に UNSW の先生方のネットワークで実践されていることでもあった。実習生で話し合いを行っていた際、UNSW の先生方の熱心さとそれに比例するであろう仕事量が話題になった。しかし、「先生方のネットワークによって、お互いを助け合いその負担を分かち合っているのであろう、だからこそ CoP (Community of Practice) が機能しているのだろう」という話が出た。私自身、他の実習生の仲間や先生方に頼ることを、負担になるのではないかと感じていた部分があった。しかし、頼るからこそ繋がりができ、自分や他人の負担を減らし、また新しいアイデアを得ることが出来ることを、UNSW の CoP に参加して学ぶことが出来たと思う。

また、それまでは学生の立場しか知らなかったが、教壇実習で教師という立場に立つことで、日本語教師がいかにプロフェッショナルな仕事であるかを強く実感できた。学生の分かる限られた日本語で授業を進める専門的な能力はもちろん、海外の場合、日本語で話す貴重な機会を作ること、教室の外で日本語に接する機会を生み出す下地作りも、日本語教師の役目である。同時に教師という立場に立つことで逆に、学生の主体性が授業や授業外の日本語教育でいかに重要であり、それを助けるのが教師であるということを、学ぶことができた。教師一人が孤軍奮闘するのではなく、学生と対話して授業をすることが、授業が生き生きとする秘訣であり、また学生が日本語を学ぼうとする姿勢を作る。

現在は、日本語教育も含め、教師の仕事をアルバイトやボランティアとして行っている。そこでは、上に述べたような、UNSW で学んだことが活かされるよう努力している。また大学院で自分の研究を進めたり仲間と共同で研究をしたりする際にも、チームプレーや情報共有を意識するようになった。自分の担当するコースや日本語教育について、事前にもっと準備するべきであったという反省点はある。しかし、今回の実習に参加できたことが、自分の将来を決めるだけでなく、それに向かって現在取り組むべきこと、自分が改善すべき点を明確にしてくれた。Intermediate の担当の飯田先生や中村先生、Jr.先生にはご迷惑をおかけしたが、この場を借りてお礼を申し上げたい。

7 来年度に向けて

7-1 来年度へ向けて

- ・ 実習経験者の話を聞く。報告書だけでなく直接やりとりをした方が具体的なイメージができるのではないかな。
- ・ UNSW の制度がどうなっているのかサイトなどを見て事前に学ぶ（日本語コースの構成、非常勤を含む所属の先生とそれぞれの担当授業など）。
- ・ 指導の教師となる先生を早めに決め、出発前に連絡をとる。先生またはレベルによって実習の進め方に大きな違いがある。予め先生と打ち合わせなどができたら、何をさせてもらえるのか、何を求められているのかがわかり、スムーズに実習に入れると思う。
- ・ 後期に行く場合、前期のシラバスを事前に見る。また、全てのコースがコースノートをもとに行われているので、自分の担当コースや教える範囲が事前にわかったら、実習期間中の内容についてコースノートと教材を見て、事前にその範囲の勉強をする。また、学期の途中で入る場合、学生がその学期にどのようなことを既に学んだのか、頭に入れておくと授業見学・教育実習を行った際に、スムーズに学生に対応ができる。
- ・ 自分で実際にどう教えるのかなど、教材を事前に把握し、事前に授業をイメージしておくとうい。教授経験のない学生は、教案の作成、実際の授業で文法項目をどのように説明し、アクティビティ、タスクをどう進行していくかなどを、本などでもよいので知っておく。
- ・ 国際交流基金、土曜校、Murray Farm Public School など、シドニーの UNSW 以外の日本語教育機関を訪問したい場合は、早めに連絡を取る。今回は実習後半から訪問したため、時間的にあまり余裕がなく、訪問できる場所・回数が制限されてしまった。
- ・ 実習参加が決まり次第、定期的なミーティングを設定する。なお、その時間を確保するために、ミーティングを行う日程を早めに決めると安心である。
- ・ 現地では UNSW の先生方も学生も実習生を「先生」という形で扱う。そのため、実習には授業の実習だけでなく、服装、態度、普段の生活においても教師としての自覚を持つ。

7-2 どんな人がこの実習に向いているか

- 実習への高い意欲・積極性・協調性
 - ・ 何週間もの長期間にわたり、海外の大学で教える意欲とスタミナを持っている人
 - ・ 実習に関わる準備、教員及び他実習生とのやり取り、課外活動などに積極的に参加できる人
 - ・ コミュニティの一員として、その中に自分も積極的に入っていける人
 - ・ チームプレーができる人

- 日本語教育の知識
 - ・ 日本語教育に関するある程度の知識を持っている人
- 将来の展望
 - ・ 修士・博士課程修了後にプロの日本語教師として活躍することを希望している人
 - ・ 海外での生活を体験してみたい人
 - ・ 修士論文との兼ね合いをつけられる人
 - ・ 実習期間中は実習に関することしかできないため、修士論文から 2 か月間離れる覚悟がある人

7-3 これから実習に参加しようとしている人に一言

日本語教師を目指す人にとってはこの実習はとても大事な機会となります。なるべく多くのことを得るために、必要な事前準備、到着後の体力、柔軟な考え方を生かして実習してください。

ガルマーエヴァ オリガ

実習でどのようなことを得たいのか、自分なりの考えを持ってください。授業と修論の準備で忙しいのはよくわかりますが、事前にできるだけ情報を入手し、具体的なイメージを持つことで得るものが全く違うと思います。そして、学生が授業料を払って出席しており、先生方も懸命に毎日毎日少しでも学生のためになる工夫と努力をこらしている場に入れていただけることに感謝してください。また、体力勝負ですから夜きちんと寝られるように先を見て動くことをお勧めします。すてきな出会いがたくさんあります。どうぞ楽しんでください！

佐々木 馨

大学院生でありながら、海外の大学で、現地で活躍されている先生に指導を仰ぎながら日本語を教える経験ができるというのは、本当に貴重でまたとない機会だと思います。将来、日本語教師になる決意を持っている人や、これまで教師をしてきた経験を海外で生かしたい人はもちろんですが、少しでも日本語教師になりたいという希望を持っている人にも積極的に参加してもらいたいと思います。こんな貴重な機会を棒に振ってしまうのは本当にもったいないことです。研修に参加すれば、精神的にも身体的にもつらいと感じることもあります。それ以上に、熱心に日本語を学び、未熟な私たちに親しみを持って迎えてくれる学生の姿や、細かく指導をしてくださる先生方、UNSWの日本語教育のシステムから、多くの感動と感銘とともにたくさんのことを学べると思います。

西澤 真奈未

大学院にいと研究で忙しく、なかなか教授経験を積むことが出来ません。そんな中、夏休みを利用して海外の教育実習に参加し、経験を積むことが出来るのはめったにないチャンスだと思います。もちろんそれには責任が伴いますが、日本語教育コースに入って将来日本語教育に関わっていく覚悟があるならば、教育実習に参加することは、自分の将来像を描く上で非常に重要なことだと思います。もし迷っているのなら、是非行くことをお勧めします。

吉田 綾

8 実習を振り返って

佐々木 馨

私は今回の実習での経験をどこまで消化できているのだろうか。まだまだ理解できていないところがある、それが正直なところである。実習の最後に言われた「ここにいる人たち（日本語教師）は生き残ってきた人たちなのよ」ということばが頭から離れないのだ。

JFL 環境で日本語を教えるということはどういうことなのか。確かに大変なことだろう。外国人として自分の立場を確立することは容易なことではないはずである。今回の実習において生活をするだけでも、もし私一人なら 2 か月を過ごすことはできなかったと思う。

しかし一生懸命日本語を勉強している学生を前にして「日本語教師はなんて素敵な仕事だろうか」と感じた。学生の学習の動機は様々で、日本の様々な魅力に気づくこともできた。

今回の実習生は教授経験がなく、必ずしも日本語教師として働くことを見据えたうえで参加を決めたわけではない。しかし、2 か月の実習を通して様々な苦しみ、喜びを経験し、その中で日本語教師の魅力を感じ、帰国前には教師を志望するようになった。

実習を通して特に四人が共通して感じたことは「教師はチームプレーである」ということではないだろうか。

自分の授業のことだけを考えていればいいのではなく、先生方がチームとして協力し合って日本語教育コースを構築している姿はとても印象的であった。私たち実習生も毎日一緒に生活する中で、困っていること、うまくいったことなど互いに相談、報告しながら進めていくことで信頼関係が生まれ、不安を減らすことができた。話し合いでは、先生方からいただいたコメントの解釈や、良い教師とはなにか、ということもたびたび考えた。また、上級のクラスの学生が Jr.先生として初級のクラスに入っているときにはどのような様子なのかを聞くことで、学生の異なる面を知ることができ、学生の理解へとつながっていった。もちろん、最初からうまくいったわけではない。個人の問題として互いの時間を拘束することを申し訳なく思ったり、考え方の違いから意見のすり合わせに悩むこともあった。しかし、時間を共有することによって一体感が生まれ、互いに支え合い、だれが話しても「実習生」の意見として捉えられるようになっていく過程を体験することができた。

教授経験のなさから、日本語に関する知識が圧倒的に少ないことも身をもって感じることもできた。普段話している日本語であるが、外国語として教えるときにどのようなルールがあると言えるのか、どのように説明すれば理解しやすいのかなど今後も学んでいかなければならない。また、日本から離れることで、客観的に日本人が話す日本語を考えるきっかけになったのではないだろうか。学習者から見た日本語という視点を持つことができたのは大きな学びであるといえるだろう。

大学での授業以外でも、マレーファーム学校（Murray Farm Public School）や土曜学校を見学させていただくことができた。そのおかげで様々な「日本語教育」の形を目の当た

りにすることができた。特に年少者の日本語教育については、国内での支援のあり方に焦点が当てられがちだが、海外においても現場が抱える課題は山積しており、そのことを知ることができたのは今後研究を進める上でも貴重なことである。また、現場によりそれぞれの学習者も学習の目的も異なるが、そこにかかわる人たちは日本語を共有するコミュニティとしてつながっており、それがうまく機能していることも感慨深かった。多くの人の力があってコミュニティが成立しているのだということを強く感じた。

私たち四人は教師を目指すにしても、今後それぞれが辿っていく道や、置かれる状況は異なるだろう。しかし今回の実習で得た学びはこれからもそれぞれの場面で活かされると確信している。日本語教師としてそれぞれが今の自分に足りないものが見えてきた分、よりよい日本語教師を目指して研鑽を積んでいきたい。

この実習には多くの方々のお力を借りて参加することができた。UNSW と協定を結び、実習の再開を実現してくださった森山先生、卵にもなりきれしていない未熟な私たちを受け入れてご指導くださったトムソン先生をはじめとする UNSW の日本語教育の先生方、そして私たちの授業を受けてくださった学生のみなさん、手続きのことで様々にご尽力くださった越智先生、UNSW の Angelina さん、寮でお世話をしてくださった Vicky さん、そして、苦楽を共にし、支えてくれた実習生の三人に心からお礼を申し上げたい。



＜実習参加者＞ （五十音順）

ガルマーエヴァ オリガ

佐々木 馨

西澤 真奈未

吉田 綾

ニューサウスウェールズ大学 (UNSW) 海外日本語教育実習の手引き

2013 年 3 月 31 日発行

発 行 お茶の水女子大学グローバル教育センター

協 力 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻
博士前期課程日本語教育コース

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel / Fax 03-5978-5965

編 集 森山新、奥村三菜子

印 刷 三鈴印刷株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-32-1

